

ニコライ・ペトロヴィチ・シェレメーチェフとイヴァールの往復書簡  
——翻訳と注解

The correspondence between Nikolai Petrovich Sheremetev and Hivart:  
A Japanese translation and commentary

---

森本（鳥山）頼子

MORIMOTO Yoriko (TORIYAMA)

The Sheremetev Theater (1775–1797), managed mainly by Count Nikolai Petrovich Sheremetev (1751–1809), was a typical serf theater in eighteenth-century Russia. The theater has staged a wide repertoire of operas, including many contemporary French operas. Hivart, a cellist at Paris Opera, served the Sheremetev Theater as a Paris correspondent. He wrote many letters about opera performances to his friend Nikolai and sent him some articles used in the theater (librettos, scores, sketches of the stage sets and costumes and so on) from Paris.

This paper is a translation of the correspondence between Nikolai and Hivart from French into Japanese and provides commentary on the correspondence. These letters are archived at Rossiiskii Gosudarstvennyi Istoricheskii Arkhiv (Russian State Historical Archive). They discuss diverse topics such as the way of performing operas, some information on the theater and music life in Paris, the performances held at the Sheremetev Theater. These letters are very important not only for research on the activities of the Sheremetev Theater but also for understanding the theater and music life in late eighteenth-century Paris.

キーワード：農奴劇場 serf theater, シェレメーチェフ家の劇場 the Sheremetev Theater, 18 世紀ロシアとフランス eighteenth-century Russia and France, フランス・オペラ上演 performance of French opera

## 1. はじめに

シェレメーチェフ家の劇場（1775–1797）は、モスクワとその近郊を拠点として、ピョートル・ボリソヴィチ・シェレメーチェフ Pyotr Borisovich Sheremetev 伯爵（1713–1788）と、ニコライ・

ペトロヴィチ・シェレメーチェフ Nikolai Petrovich Sheremetev 伯爵 (1751–1809) によって運営された、農奴劇場の代表格である。シェレメーチェフ家は約 21 万人の農奴を所有していたといわれており、この劇場ではそれを糧にして大規模な上演活動を行った。シェレメーチェフ家の劇場はオペラ上演に力を入れ、特に、ロシアではあまり取り上げられていなかった、同時代のフランス・オペラを数多く上演し、18 世紀後半のロシアで豊かなオペラ文化を創出した。

シェレメーチェフ家の劇場活動を支えたのが、パリのオペラ座でチェロ奏者を務めていたイヴァール Hivart (生没年不明) という人物である。この人物は、ニコライ・ペトロヴィチ・シェレメーチェフと定期的に書簡を交わし、パリの最新のオペラ文化について情報を寄せるとともに、シェレメーチェフ家の劇場のオペラ上演について多方面からアドバイスした。本稿では、ニコライとイヴァールの往復書簡の一部について注解を加えながら日本語に翻訳する。

## 2. 往復書簡の概要

ニコライ・ペトロヴィチ・シェレメーチェフは、シェレメーチェフ家の劇場を中心になって運営した人物である。彼は、西欧への遊学 (1769–1773) を経て、宮廷勤務に就いたのちに、1777 年に父ピョートルから劇場運営を任された。みずからもチェロをたしなんだニコライは、音楽や舞台芸術に造詣が深く、劇場のオペラ・レパートリーを拡充したほか、農奴歌手・音楽家の養成に力を入れ、また、最新の設備をそなえた新劇場を建設するなどして、劇場活動の全盛期を築き上げた。

一方、イヴァールについては、これまでの研究では詳しいことが明らかにされてこなかった。しかし、フランスの国立文書館 Archives nationales が所蔵する史料から、パリのオペラ座に在籍していたことが確認できた<sup>1</sup>。オペラ座の楽団員の 1781～1782 年の俸給表<sup>2</sup>には、「小楽団の低音楽器 Basses du Petit Chœur」<sup>3</sup> の二人目にイヴァールの名前が挙がっており、1767 年という入団年が併記されている。また、イヴァールがオペラ座の総支配人ピカール Louis-Benoît Picard (1769–1828) に宛てた、年金の支払いに関する陳情書 (1815 年 1 月 19 日付)<sup>4</sup>には、イヴァールが 3 年間の離職をはさみ、1815 年までオペラ座にチェロ奏者として在籍していたことが書かれている。これらの情報を整理すると、イヴァールは、1767～1792 年、および 1795～1815 年にオペラ座でチェロ奏者を務めていたことが分かる。

ニコライは、西欧遊学時の 1772 年 3 月～1773 年 6 月にパリに滞在しており、その際にイヴァールと知り合った可能性が高い。そして、帰国後も手紙のやり取りによって、親交を温めたのである。

ニコライとイヴァールの往復書簡は、ロシア国立歴史文書館 Rossiiskii Gosudarstvennyi Istoricheskii Arkhiv が所蔵しており、双方の書簡がそれぞれ一つのファイルにまとめて収録されている<sup>5</sup>。書簡はすべてフランス語で書かれている。

イヴァールの書簡は 153 枚に及び、1784 年 8 月 15 日から、1803 年 7 月 15 日の日付のある約 50 通が、おおむね年代順に綴じられている<sup>6</sup>。また、このファイルのなかには、イヴァールが書簡に添付したと考えられるオペラの台本や、雑誌記事の切り抜きなども含まれている。なお、最も古

い1784年8月15日付の書簡には、それ以前から手紙のやり取りがあったことが示唆されているため、ここに収められている書簡は、全体の一部であると考えられる。

一方、ニコライの書簡のファイルには34枚が収められている。ニコライの書簡には多くの修正の跡がみられるため、下書きだと考えられる。また、各書簡には、フランス語またはロシア語で、送付した日付が書かれており、1785年6月2日から1792年10月15日までに送られた約20通が含まれる。ニコライの書簡は、イヴァールのものとは比べるとかなり量が少ないが、両者の内容をつきあわせると、実際にはさらに多くの手紙が書かれたことが推測される。

なお、ニコライとイヴァールの往復書簡は、スタニココーヴィチ V. K. Staniukovich<sup>7</sup>によってロシア語に翻訳され、エリザーロヴァの著作に付録として収録されている (Elizarova 1944: 391–478)。シェレメーチェフ家の劇場に関するこれまでの研究では、ほとんどの場合、この翻訳版が参照されてきた。この翻訳版もまた、ロシア国立歴史文書館が所蔵する史料をもとにしていると考えられるが、原本に関する情報が記されていないほか、誤訳や訳し忘れが散見されるため、資料として用いるには不備が多いと言わざるを得ない。研究の精度を高めるためには、フランス語の原本を参照することが肝要である。

本稿では、ニコライとイヴァールの往復書簡を抜粋して日本語に翻訳する。書簡の内容はきわめて多岐にわたるため、今回は5通を選び出し、とりわけオペラ上演にかかわる箇所を、注解を加えながら訳していく。これらの書簡は、シェレメーチェフ家の劇場活動の実態を明らかにするための重要な資料であるだけでなく、18世紀後半のパリの劇場や音楽生活について、オペラ座の音楽家がつづった貴重な証言でもあり、さまざまな研究に資するものだといえよう。

### 3. 往復書簡の翻訳

#### (1) イヴァールからニコライ宛 (1785年5月16日)<sup>8</sup>

1785年5月16日、パリ

伯爵殿、

劇場の道具方の技術にかかわるものを見つけようと、私が本屋で行ったあらゆる検索は徒労に終わりました。残念なことに、この技術にかかわる有名な著作は一つも存在しないのです。私が見つけ、あなたもきっとご所望になるはずの唯一のものは、俳優の技術に関する2冊の本です。[中略]

デザイナーは、王妃の出産感謝式の祝典のためのさまざまな業務のせいで、仕事が遅れてしまいました。彼が現在取りかかっている《アルセスト *Alceste*》<sup>9</sup>の仕事は、当初考えていたよりも時間がかかっています。デザイナーはほぼすべての舞台装置をつくらなければならないのです。それは、舞台装置があなたの劇場のような小さな空間でも感銘を与えられるようにするためです。あなたの劇場は、私たちのオペラ座の3分の1の大きさなので、このオペラには、5回以上の舞台装置の転換があり、20人の登場人物が出てきます。彼が、オペラ座にあるような舞台装置を複製する

だけでよかったのならば、仕事はもっと早かったことでしょう。しかし、そのような構想をあなたにお送りすれば、あなたを大変困らせてしまいます。なぜなら、それは大きな劇場のためにつくられており、あなたのところで制作するのは不可能だからです。彼が昨年、《サムニウム人 Les Samnites》のほかにも何も仕事をしたがらなかったのはそのせいなのです。彼はあなたの劇場の設計図をもっていませんでした。劇場の設計図を手にした現在でも、彼は同じ理由で《アデル・ド・ポンテュー Adèle de Ponthieu》と《ダナオスの娘たち Les Danaïdes》の仕事をしなつもりです。この2つの作品は、舞台上に常にたくさんの人間がいなければならないので、小さな劇場ではまったく感銘を与えることができないのです。私がお送りするこの2つの作品の詩を読めば、この点について納得されることでしょう<sup>10</sup>。

デザイナーと道具方は、あなたの設計図が大変よくできていることや、ホールが大変すばらしいことを分かっています。しかし、あなたに申し上げているように、《アルミーダ Armide》や《ダナオスの娘たち》といった大きなスペクタクルつきのオペラには、あまりにも小さすぎるのです。《アルセスト》については、私は来る日も来る日も待ち望んでおり、あなたがこの冬に舞台装置をつくる時間を確保できるよう、手に入れ次第すぐにお送りするつもりです。《アルセスト》の後に、彼はすぐに《ゴルコンドの女王 La reine de Golconde》と《ディドン Didon》、《ケファロスとプロクリス Céphale et Procris》を完成させるでしょう。

《ダナオスの娘たち》の音楽は壮麗です。ご希望通り、あなたはこの作品のパート譜とともにスコアを受け取られるでしょう。同時に《アルセスト》の構想と、《エコー Echo》も受け取られるはずですが、ピッチンニの《アデル》に関していえば、あまりにもひどい音楽のせいで、このオペラは2、3回しか上演されませんでした。

私はその際に、《アルセスト》と《セビリヤの理髪師 Le barbier de Seville》のスコアも送らせていただきます。後者は、ロシアでつくられたパイジェッロの魅力的な音楽です。私はパート譜を写させなければなりません。いくつかのオペラ・コミックと同じように、印刷譜が見つからないのです。それぞれの登場人物のせりふとともに、スコアからうまく抜き出すのは大変骨が折れますが、俳優たちの理解のためになります。それは、あなたの写譜係を、時間がかかる仕事から解放するとともに、彼らがつくらなければならない写しの見本として役立つでしょう。

お送りする写しによって、あなたは合唱だけは別として作品を理解することができるでしょう。あなたは、オペラのスコアとともにパート譜を送るよう命じられていますが、私があなただのご要望を理解しているかどうか教えていただきたく存じます。[中略]

《セシル Cécile》やサン＝ジョルジュの《狩り La chasse》、《マトロコ Matroco》といった、まだまったく印刷されていないオペラの音楽を手に入れるのは不可能です。せいぜい、コメディ・イタリエンヌが所有するヴォードヴィルつきのオペラ・コミックしか手に入れられません。あなたがカタログで指示されたオペラ・コミックのうち、手に入れられたものをお送りします。そのほかに、この劇場の最も美しいオペラ・コミックと、新しいものもすべてお送りします。

この品物に、あなたがカタログで同じように指示された詩の大部分と、先に送ったオペラの詩も

付け加えました。作品をはっきりと理解できるようにするためです。《アルセスト》の詩のように、オペラ座の火事で焼失してしまったために、いまではもう見つけられないオペラの詩もいくつかあります。私はそれをさまざまな人のところで、さらに3か月かけて探しましたが、見つけることができませんでした。幸いにも、作者が1部譲ってくれました。それは実のところ、大変汚れていました。私は少しでもきちんとした状態になるよう、カバーを張り替えました。あなたが、成功しているすべての作品の詩を手に入れられればよかったです。というのも、いくら時間がたつてからそれらを見つけるのは大変なことですから。

伯爵殿、劇場の仕掛けに関して、私のあらゆる搜索から何も見つからなかったことに絶望されることでしょう。そして、この問題については、大きなオペラを上演するのに必要な細かいことをすべて把握されることがいかに重要なことか。そこで私は、20年間毎日見てきた劇場の仕掛け全体を、しっかり注意して、もっと近くで観察することにしました。この技術の秘密を知るためです。私はそれについて、20篇のさまざまな記事からなる小さな著作をつくったところです。この小さな書き物がいくらかお役に立てば、私はこの上なく嬉しいです。なぜならば、あなたに気に入られたいという欲求が、それに取りかからせた唯一の動機なのですから。[中略]

敬具 イヴァール

### 【解説】

現存が確認されている書簡のうち、比較的初期のものである。この書簡では、イヴァールが、シェレメーチェフ家の劇場のために行ったあらゆる仕事について、事細かに報告している。そのなかでも、劇場の仕掛けについて書かれた読み物を見つけれなかったために、自分自身が舞台を観察して著作をつくったというのは、オペラ座の楽団員のなせるわざだといえる。この著作について、ニコライはその後の書簡で絶賛しており<sup>11</sup>、舞台づくりに役立てた。つまり、イヴァールのおかげでオペラ座の技を“盗む”ことができたのである。

また、この書簡では、オペラについての言及が多くみられる。注目すべきは、当時オペラ座で上演されていた《アルセスト》や《ダナオスの娘たち》、《アルミード》といったトラジェディ・リリックの話題が豊富なことである。シェレメーチェフ家の劇場のオペラ・レパトリーの中心は、オペラ・コミックであったが、この書簡から、実際にはトラジェディ・リリックにも強い関心を示していたことが分かる。イヴァールは、書簡のなかで上演が難しいことを示唆しながらも、上演の準備に全面的に協力している。

### (2-1) イヴァールからニコライ宛 (1787年2月10日)<sup>12</sup>

伯爵殿、

昨年(1786年)の12月24日のお手紙にお返事申し上げます。その手紙から、私はあなたがまだ荷物をまったく受け取られていないことを知り、最大の苦しみを感しました。9月の終わりに出港したどの船

も、たいい首尾よくいっていないのだと思います。しかしながら、親切な船長がまだ何人かいるとすれば、まもなくよい知らせを受け取るという望みをもつべきです。というのも、私はようやくこのたび、あなたをご親切にお送りくださった毛皮をルーアンより受け取りました。伯爵殿、私にそれに対して心より感謝しています。これは私があなたのためにさせていただいた小さなご奉仕には、高価すぎる品物です。毛皮は、とても長い道中で、小さな災難にあったのです。船長は、さまざまな寄港地でいくらか前払いをさせられた後に、彼の船の荷物や、船そのものに対して、およそ60,000リーヴルの借金を強いられたようなのです。その所有者たちは、やむなくそれを受け入れるか、その荷物をあきらめなければならなかったのです。

あなたの手紙を受け取られたル・サージュ Le Sage 夫人<sup>13</sup>は、私が次の春にあなたに送らせていただく品物の発送を引き受けてくださいます。ただ、この件で生じるわずかな支払いの勘定書を、彼女が毎年5月にあなたのお父上に発送する勘定書と一緒にすることを、申し伝えるよう言われました。それは、2つの異なる項目をつくらないようにするためです。ということで、伯爵殿は、お二人がご所望になっているすべてのオペラや花<sup>14</sup>などの品物を同時にお受け取りになるでしょう。花については、より生き生きとした美しいものをお送りするので、きっと満足されることを期待しています。また、去年のようなひどい不都合を避けるために、それらは春に発送される予定です。ル・サージュ夫人の住所は、ヴィヴィエヌ通り6番地 rue Vivienne N°6です。

印刷されていない楽譜は、多くの金を支払わなければ手に入りません。つまり手書きの状態です。そのためには、作者と交渉しなければなりません。この件については、コンセル・スピリテユエルの支配人のルグロ Legros<sup>15</sup>氏のご提案をご覧ください。同封の勘定書は、あなたのリストに挙がっているオラトリオやモテット等に関するものです。あなたがこの件についてご意向を知らせてくださるまで、私はとりあえずデュグ神父 abbé Dugué<sup>16</sup>による単声の小さなモテット数曲を手に入れるよう努めます。マドモワゼル・カスターネリ Castagnérie<sup>17</sup>と別の楽譜屋が伝えるところによれば、それは印刷されていないそうです。

現在、私たちのところでは、2つのオペラが大きな成功を収めています。すなわち、ド・ル・モワヌ De Le Moine の《フェードル Phèdre》<sup>18</sup>とサッキーニの《コロヌスのオイディプス Oedipe à Colone》です。前者はすでに印刷されています。

サリエリは、復活祭の後によく《タラール Tarare》というオペラを上演します。上演された《オラース兄弟 Horaces》は、壮麗な音楽に満ちていましたが、残念ながら歌詞があまりにもひどいために、まったく成功を収めませんでした。それはまったく印刷されないのも、そのなかの最も小さな曲でさえも伯爵殿のために手に入れることはできません。フィリドールによる《ペルセ Persée》というオペラも、《オラース兄弟》と同じ状況であり、もはや印刷されることはありません。

私は、あなたが指示された《アティス Athis》の5人の登場人物に、《ニーナ Nina》と《タウロイのイフィゲニア Iphigénie en Tauride》の登場人物も加えます。この2つの作品の舞台装置も付け加えます。

今後は、私が必要だと思う登場人物しかお送りしません。手に入れざるをえないいくつかの特別な舞台装置と同じです。というのも、あなたはすでに、ほぼすべてのさまざまな衣装や、宮殿や神殿、監獄、庭、森、回廊といった重要な舞台装置を手に入れていると考えられるからです。[中略]

敬具 イヴァール

1787年2月10日、パリ

## (2-2) ルグロからシェレメーチェフ宛 (日付なし)

私の親戚であるイヴァール氏が、私たちに手書きの楽譜を要求してきました。私たちは彼に、それを願うのであれば、購入と写しの費用の一部を負担しなければ、手に入れることはできないとお答えしました。

(イヴァールは、オラトリオもモテットも一つとして印刷されていないことをここで指摘しておきます。印刷されている唯一のラテン語の楽譜は、ゴセックのミサ曲と、ハイドンの《スタバト Le Stabat》です。) <sup>19</sup>

たとえば、サッキーニのオラトリオ《エステル Esther》<sup>20</sup>の楽譜は、その獲得と写しの費用を合わせて（それは「コンセール」の支配人の独占物なのです）、1,500 リーヴルかかりました。

同じく、同じ作者による、印刷されていない3つのモテットは720 リーヴルかかりました。

したがって、これら4つの作品に対しては、1,500 リーヴルと引き換えに、写しのスコアの所有権を譲ることを提案します。これが、この4つの品物に対してできることのすべてです。

ほかの楽譜に関しては以下の通りです。

- ・オラトリオ スコアで360 リーヴル
- ・モテット スコアで240 リーヴル
- ・小さなモテット スコアで120 リーヴル
- ・フランス語の演劇または宗教劇 スコアで120 リーヴル

コンセール・スピリチュエルの支配人ルグロ

この楽譜は決して印刷されないことをお知らせしておかなければなりません。それについては文書でも約束されるでしょう。

### 【解説】

この書簡では、コンセール・スピリチュエルの上演作品について話題になっている。文面から、ニコライが、オラトリオやモテットの楽譜を手に入れるよう、イヴァールに依頼したことが推測できる。ここから、ニコライの興味が、オペラだけにとどまらず、パリで上演されていた幅広い音楽作品に及んでいたことがうかがい知れる。そしてこの依頼に対して、イヴァールは、血縁関係にあった、コンセール・スピリチュエルの支配人ルグロに直接交渉し、ニコライに宛てて手紙を書いている。イヴァールのこうしたコネクションもまた、劇場活動を支えるうえで、重要な役割

を果たしたといえるだろう。

### (3) ニコライからイヴァール宛 (1787年3月6日) <sup>21</sup>

1787年3月6日

親愛なるイヴァール様、

私は2月10日のあなたのお手紙を受け取りました。あなたがようやく毛皮を受け取られたことを知り、嬉しいです。私の方は相変わらず、船によって到着する荷物を見ることも、知ることさえもできず、苦しんでいます。親愛なるあなたに、それがどれほど私を苦しめているかお伝えすることができません。失われた金についてはさておき、私を喜ばせてくれるものがなくなることは、大変つらいのです。私の荷物が託された船長のもとで起こったことを調べてください。それは保険がかけられているので、金は失われたいはずで、親愛なるあなたよ、今後は、一等船で送らせるようお願いいたします。それがかなわない場合、下等船で送るくらいなら、何も送らない方がましです。

ル・サーージュ夫人については、私の勘定書を、父の勘定書に組み入れるという無駄な予防措置をとられることに大変驚いています。彼女に次のように説明してください。彼女が私のために使うつもりで、2,000フランについて、支払われるか信用できないならば、無駄な予防措置などせずに、仕事を引き受けなくてよいと。それは何の役にも立たないのでなおさらです。なぜなら、私は自分の家に住み、年をとっており、保証を必要としない地位にいるのです。私はこの哀れな考えに大変驚いています。私がパリにいたときに、彼女のご主人が、私の一言だけで20,000フランを預けてくださったことを、彼女は思い出すべきです。この問題を解決していただくようお願いいたします。もし、彼女が事の本質に迫ることができなければ、ゴダン Godin<sup>22</sup>氏か、というよりも、誰か別の人に頼んでください。その人に対して、依頼のための金を支払います。

親愛なるあなたよ、私に最高に美しい音楽を送ってください。作品が印刷されていなければ、写しを注文してください。[中略]

追伸

舞台装置の転換は、ホイッスルの音で行われなかったように思います。親愛なるあなたよ、それがどのように行われるか教えてください。私はベルが同じ効果を生み出すと思います。例外的に、それは聞こえません。親愛なるあなたよ、花については、それは劇場にとって花飾りになったり、さらに帽子として女性の飾りになったり、花束になったりすると考えてください。

#### 【解説】

(2) の書簡への返信である。ニコライは、イヴァールから送られた荷物が届かないことに対する不満を訴えている。イヴァールは、シェレメーチェフ家の劇場のために、オペラの楽譜や台本、舞台装置や小道具、衣装のスケッチなどあらゆるものをパリで調達し、手紙とは別に定期的に船で



送っていた。しかし、この書簡にみられるように、しばしば、荷物の到着にはかなりの時間がかかった。こうした遅延は、ニコライにとっては、オペラの仕込みが遅れることにつながったため、重大な問題であり、上演活動の一つの大きな障壁になっていた。

#### (4) イヴァールからニコライ宛 (1787年5月3日) <sup>23</sup>

1787年5月3日、木曜日、パリ

伯爵殿、

あなたがお送りくださった先の3月6日のお便りを読んで、船の件で相変わらずいつも心配されていることを知り、きわめて残念に感じました。あなたは船の到着を来る日も来る日もお待ちになり、船について一つとして知らせを受けていないのですね。私の調査によって分かった唯一のことは、あなたの荷物の運命について少しだけ私を安心させてくれました。つまり、この船の船長は、理由があって、考えていたよりもずいぶん早くにどこかの港に停泊しなければならなかったと推測されるのです。というのも、去年は、通常よりも1か月も早く氷が発生してしまったのです。そういうわけで、船がロシアに到着したらすぐに、あなたがよい知らせを受け取られることを私も願っています。私は、ゴダン氏の言葉を当てにしすぎていました。彼は、9月20日までは、荷物が発送できるとルーアンから通知されたそうです。伯爵殿がおっしゃる通り、今後は、よい季節に出港する一等船を使えないのならば、何も送らないことにします。

こちらでは、舞台装置をいっせいに動かすために、ホイッスルを使っています。この音の意味は聴衆にもしっかり伝わっており、伯爵殿がまさにご指摘されたように、実際にはおかしいです。反対にベルは、こちらでは、ほぼ一日中、消防士にどこかで火の手が上がったことを知らせるために使われています。それはしばしばおきますが、この件についてとられている賢明な予防策によって、危険はありません。「熱湯でひどい目にあつた猫は水を恐れる[<sup>あつもの</sup>糞に懲りてなますを吹く]」のです。

ル・サージュ夫人は、伯爵殿からの知らせも受け取り、あれ以来、態度を柔らかくしました。もつとも、運命がふるまいを変えたと言うのがよいでしょう。彼女は、勘定書に関して、伯爵殿が望みのようにするでしょう。彼女は、あなたの荷物と私の荷物を5月15日に同時に送るはずで

伯爵殿が、ルグロ氏の楽譜について提示された値段でお求めにならず、また、より安く手に入れることもできないので、私はメロー氏と合意に達し、ヴォルテールの歌詞による、彼の《サムソン Samson》というオラトリオを手に入れることになりました<sup>24</sup>。それは、いくつかの美しいモテットと同様に、コンセール・スピリチュエルで上演されたすべてのオラトリオのなかで、最も大きな成功を収めたものです。モテットの楽譜は、いとこのルグロの楽譜よりもはるかに安いとはいえ、少しも引けをとりません。

そのほかに、単声の2つのモテットがあります。それは、伯爵殿がご所望になったデュゲ氏のモテットに匹敵する作品です。伯爵殿が覚え書きで指示されたオーボエとバスーンのための独奏曲は、まったく注文しませんでした。というのも、《アネットとリュバン Annette et Lubin》や《バラ冠

の娘 *La rosière*)、《才気ある女追求者 *La chercheuse d'esprit*》<sup>25</sup>といったバレエの曲や、ハイドンの19番の美しい交響曲のなかに、いくつか含まれているからです。私は、ハイドンの交響曲を、プレイエルのいくつかの四重奏曲と一緒に送ります。この交響曲のフィナーレでは、代わる代わるヴァイオリンとフルート、オーボエ、バスーン、ホルン、チェロが独奏します。

私たちは、《タラール》というオペラの稽古を始めました。このオペラの音楽は傑作であり、歌詞もこのスペクタクルにとってまったく新しい種類のものです。それは、かの有名なサリエリによって作曲されるに十分値するものです。サリエリは、崇高な音楽によって歌詞を完全に素晴らしく表現しました。このオペラは5幕とプロローグからなります。私は、このオペラの第3幕の魅力的な歌をどうしても伯爵殿にお送りしたかったので、お返事が遅れてしまったのです。私はそれをひそかに書き写しました。それは、タラールの妻アスタジーのために開かれた祭りで、宦官長カルページが歌う曲です。タラールの成功をねたんでいる君主アタルは、タラールを不幸にするために、彼女を誘惑したがついています。この作品のあらゆる陰謀が、こうしたことにもとづいています。

この作品の詩を手に入れるのは難しいでしょう。というのも、王が、それをまったく印刷したがるにそうなのです。しかし、私はこのことについてまったく驚いておりません。なぜなら、ボーマルシェは、この作品のなかで、より高貴な人々を嘲弄しているからです。

伯爵殿に深い尊敬をこめて。

敬具 イヴァール

### 【解説】

ここでは、イヴァールが、ルグロからの提案をのむ代わりに、ニコライのために独自のルートでよい音楽作品を手配することを伝えている。また、そのほかに、ニコライが器楽曲を手に入れたいとイヴァールに伝えたことが分かる。それに対してイヴァールは、自分の経験を頼りに、ニコライの要望に見合った作品を提案している。

また、この書簡には、サリエリのトラジェディ・リリック《タラール》の話題が出てくる。イヴァールは稽古を通じて、この作品の価値を認め、ひそかに書き写した楽譜を送るとともに、作品に関する情報をいち早くニコライに伝えている。《タラール》は、それから約1か月後の1787年6月8日にオペラ座で初演され、イヴァールが評価したとおりの大きな成功を収めるとともに、政治的なほめかしに満ちたあらすじが物議を醸すことになった。ニコライにとって、パリの音楽界の第一線で活動していたイヴァールの評価は、きわめて重要だったと考えられ、トラジェディ・リリックの上演を志向した背景にも、彼の批評が強い影響を及ぼしたといえるだろう。

(5) ニコライからイヴァール宛 (1787年11月5日頃)<sup>26</sup>

(1787年11月5日に送られた)<sup>27</sup>

私は10月5日付のあなたのお手紙を受け取りました。あなたがお元気だと分かり嬉しいです。

親愛なるあなたよ、来年の送付物についても、今年と同じように正確に対処していただくようお願いいたします。今年、私は大変満足しました。[中略] クラヴサンのかたちをしたフォルテピアノ *fort et piano* については、私は考えを変えましたので、もう必要ありません。この件については、こちらで望ましいものをすべて手に入れました。こういうわけで、私が依頼したこの件については遂行しないでください。まったく無駄になってしまいますから。親愛なるあなたに、スコアのパンフレットを忘れずに送ってくださいますようお願いいたします。それは私にとって大変役立ちます。今年お送りできないようであれば、来年、私のために手に入れるようご配慮ください。ところで、あなたは私たちのお祭りのうわさをお聞きになったと思います。実際に、すべてがかなりうまくいき、陛下はいつものような優しさをもって、陛下のために行われたあらゆるお祭りのなかで、最も豪華で楽しいものだったとおっしゃってくださいました。そして、あなたが送ってくださった設計図にしたがってこの機会に新たにつくられた劇場で、《サムニウム人の婚礼》を上演しました。衣装もあなたがお送りくださったデッサンをもとにしました。サッキーニの《ルノーRenaud》<sup>28</sup>のデッサンも、郵送していただけると嬉しいです。

最も必要なのは、衣装のデッサンです。舞台装置や、アルミードが乗ってくる二輪馬車のデッサン、アルミードの衣装、彼女のかぶと、最後の舞台装置のデッサンなども必要です。女戦士や十字軍の騎士、ルノーの衣装も同様です。上演をより容易にするために、この作品の最も細かなところまで教えてくださったら嬉しいです。私はパンフレットをもっていません。スコアしかもっていないのです。ご存じのとおり、スコアには、作品を理解するのに必要なことが十分に記されていません。たとえば、アルミードは、馬車に乗って空から降りてくるのか、地上からやってくるのか分かりません。同様に、彼女は作品の始まりから、かぶとをつけているのか、途中だけなのかも分かりません。親愛なるあなたよ、この作品の詳細をしっかりと理解して、それを教えてくださったらありがたいです。あなたができる限り最も正確に、問題に取り組んでくださるほど喜ばしいことはありません。この作品のパンフレットを郵送していただくのは、かなり高くなります。そのため、あなたの説明が、すべての代わりになると思ってください。サッキーニの《ルノー》に関することだけを郵便で送ってください。親愛なるあなたよ、ごきげんよう。大変うずうずしながら、あなたのお返事とデッサンを待っています。あなたにささやかな贈り物をしたかったのですが、発送するのは困難だと思っています。[中略] 私からの贈り物として、1,000 リーヴル送金します。

### 【解説】

シェレメーチェフ家の劇場で行われたオペラ上演についてニコライが自ら語った、数少ない書簡の一つである。ここで述べられているのは、1787年6月30日にエカテリーナ2世を招いてクスコヴォで行われた祝典であり、このときに、グレットリのオペラ・コミック《サムニウム人の婚礼》の上演によって、同地に新劇場が開館した。この書簡で、ニコライはその成功を伝えるとともに、新劇場の建設やオペラの衣装の作成に関して、イヴァールの協力を示している。

また、この書簡では、ニコライが、サッキーニのトラジェディ・リリック《ルノー》について質

問を浴びせている。その内容からは、ニコライが、オペラの進行の細かな点に疑問をもっていることや、できる限りオペラ座と同じかたちで上演しようとしていることが伝わってくる。そしてイヴァールは、ニコライのこうした質問に対して、多くの場合、几帳面に回答し、オペラ座のやり方を伝授した。《ルノー》は、シェレメーチェフ家の劇場で1788年から1792年の間に上演が実現したとされている (Lepskaia 1996: 76-77)。

#### 4. おわりに

本稿で翻訳した往復書簡からは、パリのオペラ文化に強くあこがれ、試行錯誤しながらオペラを輸入しようとしたニコライと、それに懸命に応え、オペラ上演をあらゆる面からサポートしたイヴァールの姿がみてとれる。とりわけイヴァールは、音楽家として、確かな目でオペラや音楽作品を評価し、それをニコライに伝えたほか、オペラ上演の細かなノウハウを伝授することができた。また、さまざまなコネクションを生かして、パリの劇場関係者や音楽関係者に助言を求めることもできた。つまり、イヴァールは、オペラ上演を行ううえでまたとないアドバイザーであったのである。

シェレメーチェフ家の劇場は、18世紀末にかけて、多彩なオペラ・レパートリーをそなえたロシア屈指のオペラ劇場へと成長していった。劇場の活発なオペラ上演の原動力の一つとなったのが、イヴァールの多方面からのサポートだったというのは間違いないだろう。

本稿の作成にあたって、本学の井上さつき教授から資料を提供していただきました。また、財団法人日東学術振興財団より海外渡航助成を受けました。心より感謝申し上げます。

- 1 この史料については、本学の井上さつき教授が、同文書館にて発見され、筆者に提供してくださった。井上教授のご厚意に対して、心から感謝申し上げる次第である。
- 2 France, Archives nationales (F-Pan), AJ<sup>3</sup> 15. Comptabilité. Appointements du personnel. 1750-1783.
- 3 当時、オペラ座のオーケストラは、小楽団 *le petit chœur* と大楽団 *le grand chœur* の2つのアンサンブルに分かれていた。小楽団は、オーケストラのより優秀な楽器奏者を再編したものであり、クラヴサンを囲み、エールやレシタティブを伴奏するとともに、声を支え、ときには声と対話することもあった (Serre 2011: 115)。
- 4 F-Pan, AJ<sup>3</sup> 77. Correspondance des musiciens de l'orchestre concernant les pensions de retraite.
- 5 RGIA (Rossiiskii Gosudarstvennyi Istoricheskii Arkhiv), f. 1088, op. 1, d. 186, l. 121.
- 6 往復書簡には、日付が入っていないものや断片的なものも多く、厳密な書簡の数の把握は困難である。
- 7 この人物は、シェレメーチェフ家の劇場のモノグラフ (V. K. Staniukovich. 1927. *Domashnii krepostnoi teatr Sheremetevykh XIII veka Leningrad.*) の著者である。
- 8 RGIA, f. 1088, op. 1, d. 186, l. 6-7ob.
- 9 この書簡に挙がっているオペラの作曲者、正式名称、初演年と場所は、以下のとおりである。グルック Christoph Willibald Gluck (1714-1787) 《アルセスト Alceste》(1776年、オペラ座)、グレトリ André-Ernest Modeste Grétry (1741-1813) 《サムニウム人の婚礼 Les mariages samnites》(1776年、コメディ・イタリエンヌ)、ピッチニ Niccolò Piccinni (1728-1800) 《アデール・ド・ポンテュー Adèle de Ponthieu》(1781年、オペラ座)、サリエリ Antonio Salieri (1750-1825) 《ダナオスの娘たち Les Danaïdes》(1784年、オペラ座)、グルック《アルミード Armide》(1777年、オペラ座)、モンシニ Pierre-Alexandre Monsigny (1729-1817) 《ゴルコンドの女王、アリーヌ Aline, la reine de Golconde》(1766年、オペラ座)、ピッチニ《ディドン Didon》(1783年、オペラ座)、グレトリ《ケファロスとプロクリス Céphale et Procris》(1773年、ヴェルサイユ)、グルック《エコーとナルキッソス Echo et Narcisse》(1779年、オペラ座)、パイジエロ Giovanni Paisiello (1740-1816) 《セビリヤの理髪師 Le barbier de Seville》(1782年、サンクトペテルブルグ、宮廷劇場)、ドゥゼード Nicolas Dezède (1740頃-1799) 《セシル Cécile》(1780年、ヴェルサイユ)、サン＝ジョルジュ Joseph Boulogne Saint-Georges (1739頃-1799) 《狩り La chasse》(1778年、コメディ・イタリエンヌ)、グレトリ《マトロコ Matroco》(1777年、コンデ公邸)。
- 10 《アルセスト》、《アデール・ド・ポンテュー》、《ダナオスの娘たち》はいずれもトラジェディ・リリックであり、《サムニウム人の婚礼》はオペラ・コミックである。

<sup>11</sup> RGIA, f. 1088, op. 1, d. 121, l. 4.

<sup>12</sup> RGIA, f. 1088, op. 1, d. 186, l. 54–54ob, 56–57.

<sup>13</sup> この人物について詳細は不明だが、(3)の書簡から、ニコライがパリで知り合った人物だと推測できる。

<sup>14</sup> 劇場で使用する造花のことであろう。(3)のニコライの書簡においても、花の話題が出てくる。

<sup>15</sup> ルグロ Joseph Legros (1739–1793) は、オペラ座の歌手を経て、1777–1790年にコンセール・スピリチュエルの支配人を務めた人物。ハイドンやモーツァルトの交響曲をプログラムに取り入れるなど、新しい試みをしたことで知られる。

<sup>16</sup> デュゲ Dugué (生没年不明) は、サン＝ジェルマン＝ロセロワ Saint-Germain-l'Auxerrois 教会の楽長と、パリのノートルダム寺院の楽長を務めた人物であり、作曲家でもあった。彼の作品は、1766年からコンセール・スピリチュエルで取り上げられた (Pierre 1975: 138, 290)。

<sup>17</sup> 楽譜商カスタネリ Marie-Anne Castagneri (1722–1787) のことだと思われる。

<sup>18</sup> この書簡に挙がっているオペラの作曲者、正式名称、初演年と場所は、以下のとおりである。ル・モワヌ Le Moine (1751–1796) 《フェードル Phèdre》(1786年、フォンテンブロー)、サッキーニ Antonio Sacchini (1730–1786) 《コロヌスのオイディプス Oedipe à Colone》(1786年、ヴェルサイユ)、サリエリ 《タラール Tarare》(1787年、オペラ座)、サリエリ 《オラース兄弟 Les Horaces》(1786年、ヴェルサイユ)、フィリドール François-André Danican Philidor (1726–1795) 《ペルセ Persée》(1780年、オペラ座)、ピッチニ 《アティス Atys》(1780年、オペラ座)、ダレイラック Nicolas-Marie Dalayrac (1753–1809) 《ニーナ、または恋狂い Nina, ou La folle par amour》(1786年、コメディ・イタリエンヌ)、グルック 《タウロイのイフィゲニア Iphigénie en Tauride》(1779年、オペラ座)。

<sup>19</sup> イヴァールの筆跡で余白に書かれている。ルグロの手紙を受け取った後に、書き加えたと考えられる。

<sup>20</sup> サッキーニのオラトリオ《エステル Esther》は、1786年にコンセール・スピリチュエルで初演され、大きな成功を収めた。

<sup>21</sup> RGIA, f. 1088, op. 1, d. 121, l. 15–15ob.

<sup>22</sup> イヴァールは、ゴダン Godin (生没年不明) という人物を介して、ニコライから、依頼を遂行するための金を受け取っていた。この人物は、フランスに住んでいたと考えられるが、詳細は不明である。

<sup>23</sup> RGIA, f. 1088, op. 1, d. 186, l. 60–61.

<sup>24</sup> メロー Nicolas-Jean Le Froid de Méreaux (1745–1797) のオラトリオ《サムソン Samson》は、1774年にコンセール・スピリチュエルで初演され、大きな成功を収めた。

<sup>25</sup> バレエ《アネットとリュバン Annette et Lubin》(1778年、オペラ座初演) は、ノヴェール Jean-Georges Noverre (1727–1810) が振り付けを担当し、ゴセック François-Joseph Gossec (1734–1829) が作曲した。《バラ冠の娘 La rosière》(1783年、オペラ座初演) と《才気ある女追求者 La chercheuse d'esprit》(1778年、オペラ座初演) は、ガルデル Maximilien Léopold Philippe Joseph Gardel (1741–1787) が振り付けを担当した (いずれも作曲者不明)。

<sup>26</sup> RGIA, f. 1088, op. 1, d. 121, l. 24–24ob.

<sup>27</sup> この部分はロシア語で書かれている。

<sup>28</sup> サッキーニ 《ルノー-Renaud》(1783年、オペラ座初演)。

## 参考文献

Elizarova, N. A. 1944. *Teatry Sheremetevykh*. Moscow.

Lepskaia, L. A. 1996. *Repertuar krepostnogo teatra Sheremetevykh. Katalog p'és*. Moscow.

Pierre, Constant. 1975. *Histoire du Concert spirituel: 1725-1790*. Paris.

Serre, Solveig. 2011. *L'Opéra de Paris (1749-1790) : Politique culturelle au temps des Lumières*. Paris.

鳥山頼子 2010 「シェレメーチェフ家の農奴劇場におけるオペラ上演と一座について」 『愛知県立芸術大学紀要』第40号: 209–220.

——— 2010 「シェレメーチェフ家の農奴劇場におけるオペラ上演の実態」 『愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程研究成果報告書』第2号: 86–100.

——— 2009 「ロシア音楽史における農奴劇場——シェレメーチェフ家を中心に」 『愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程研究成果報告書』第1号: 23–41.

矢沢英一 2001 『帝政ロシアの農奴劇場——貴族文化の光と影』 東京: 新読書社.